

本書『経営学史序説——ニックリツシユ私経済学論——』は、森 哲彦（以下著者とよぶ）がこれまで蓄積してきたドイツ経営経済学史研究を一巻にまとめて公表したものである。

すでに、本書に対する論評がいくつか与えられている。岡本人志（大阪市立大学『経営研究』第四五巻第一号、一九九四年五月）、大橋昭一（関西大学『商学論集』第三九巻第二号、一九九四年六月）、鈴木辰治（新潟大学『経済論集』第五七号、一九九四年一〇月）。

本書『経営学史序説』は、ドイツ経営学史研究を一般課題とし、とくにその代表格であるニックリツシユ学説、それも私経済学に関する学史研究を、当時の代表的な私経済学諸説との相互比較をおこないながら論究している。著者は、最近、日独両国において、経営経済学理論の有する歴史的な所産（性）が再認識されつつあり、したがって、その論理解明の通路として経営

学史の研究方法を確立しておく必要があるという。

本書の研究内容は、主に、経営学史の研究手法と課題、ドイツ資本主義と私経済学、ニックリツシユ私経済学の基礎理論・企業計算論・企業財産組織論・企業分析論、ドイツ電機工業企業の形成史、私経済学論争の展開からなる。

経営理論史と経営事実史との対応関係は、当然のこと本来密接なものであるから、その相互関連性を注視し、観察する必要がある。日本においては、ドイツ経営学史にかぎらず、外国経営学史に関する研究は理論そのもの・学説じたいを論究するものが多かった。つまり、欧米学説・理論を即自的に理解し、解明することだけに重要な意義をみだしてきた。しかしながら、今回の著作『経営学史序説』はあくまで、ドイツ経営史事情との現実的連関性を全面的に意識した究明をおこなっている。それにつづいて、その全体的眺望のもとに経営学史の研究視点のありかたを議論している。

経営学史の研究方法は、まず文献史的研究を準備段階とし、つぎに資本主義の発展法則の連関において学説史的研究の問題を克服し、さらに経営学理論の経済的土台の諸問題と経営学理論の相対的独自性の諸問題を相互連関づけて解明し、全体として総合的に把握探究することが必要である（一七頁）。

著者が重視するドイツ資本主義企業経営は、その産業部門なかでもっとも指導的な地位を占める工業である。だから、経営学理論の生誕は、工業企業経営の観点から発生論的に究明す

ると、理論の成立は工場制経営の段階に認められるものとなる。

さらに、経営学理論の生成発展を規定する工場制経営→統合経営→コンツェルン経営の発展は、その経営の外的条件として社会経済の発展段階に連関づけされるべきものである（六頁、七頁）。

一九世紀後半の独占発端期にエミングハウス「一般工業学」（一八六八年）が、一九世紀末から二十世紀初頭の独占確立期にエーレンベルヒやワイヤーマン・シエーニツツ、シュマールンバッハ、ニックリツシユなどの諸理論が登壇している。

著者は、商業経営よりも工業経営にかかわるドイツ経営学史の理論展開を重要視する。このことは、経営学理論の発生が工業経営の場を主たる舞台としてなされた事実にもとづいている。評者はそこに、『経営学史序説』における一番重要な主張があると判断する。

なぜなら、日本の経営学者があえておこなうドイツ経営経済学史研究である点を考えるならば、それは日本の経営学史に関する研究にまでつながるものでなければならぬからである。日・独資本主義のちがいにみれば、資本主義経済問題として共有であろう理論と実践の関連性は、社会経済体制内における商業経営から工業経営への重点移動に即した学問形態の変質を要求していた。ドイツのばあい、その関係論者の一人がニックリツシユであった。

ひるがえって日本の事情をみるに、明治後期より工業経営に

対する関心が確実に生じていた。大正一年には神田孝一『実践工場管理』が公刊され、つづいて渡辺鐵蔵の工場経営論研究、上野陽一の能率研究と実践活動など、資本主義工業経営の発展に即した理論・実践が活発に展開されはじめていた。ところが、大正後期に海外留学してきた高等教育機関の研究者たちは、もっぱら欧米経営理論を導入することに熱心なあまり、自国経営理論とくに工場管理学の出生に対する確認を怠っていたのである。

上記の論者のうち渡辺鐵蔵は、主著『商事経営論』（大正一年）において、ドイツ私経済学論を方法論的関心をもって紹介していた。だが彼は、日本企業の現実問題も多くとりあつかっていた。その意味では、「ニックリツシユの経済的認識は優れて現実的であった」（森、二〇五頁）ように、日本企業に関する渡辺の認識も現実的であったのである。

ニックリツシユ私経済学論という副題をつけた本書『経営学史序説』は、理論史的研究に主軸があるというよりむしろ、ニックリツシユ私経済学論をとおしてのドイツ経営史研究に重点があるようにみえる。従来のドイツ経営学史研究書が、理論そのものだけにとらわれたような志向を有していた点にくらべ、特長的である。

一方、日本経営史の分野では、日本においても工業経営の場を中心対象にして経営学という学問は生成・展開してきた、という歴史的な事実を裏づける関係文献の復刻版も刊行されはじめる（三三〇頁、二九九頁、三〇二頁も参照）。

以上、著者の論述を、①経営学の本来的な出自は工業経営問題のなかに求められるべきこと、②経営思想問題からの説明があること、という二点にそって論評してみた。もちろん評者の関心による要約と批評である。本書『経営学史序説』は、ドイツ経営理論史をドイツ経営事情史との関連性のなかで分析したきわめて重厚な理論書である。評者の問題意識でいえば、本書は経営・会計史的分析をふまえた経営学史的研究に基調があり、経営思想史的研究の立場はなお明晰とはいえない。本書の結論部にしめされた研究の到達点を前提に、さらにドイツ経営思想史へと進路をとり、これに対していかなる分析をおこなってかれるか、興味をそそられる著作である。（千倉書房、一九九三年三月、三〇九三―三八ページ、五〇〇〇円）

評書

めている。ただし他方で、そうした経営史的事実認識と日本経営学史における研究蓄積とがうまく連携できていない。

そのため、従来しめされてきた日本経営学史に関する理解である、商業・商事経営学→商工経営論→経営経済学へという斯学における系譜づけは、訂正されないままであった。正確に言えば、明治以来の、商業・商事経営学→商工経営論→経営経済学という流れではなく、大正時代、商工経営問題のなかで絶対的相対的比重を増してきた工業経営問題に注目し、これに対応する学問であった工場管理学・工場経営法という学問形態が、明確に誕生していたことに留意しなければならない。

著者は、ニックリツシユの評価を借り、ドイツにおけるエミングハウス『一般工業学』の重要性にふれている。だがこの『一般工業学』は、その後（二十世紀）に影響をおよぼすことがなかった（二六頁）。そのへんの事情は日独に共通であったわけである。

さてニックリツシユ私経済学論を通観し、彼の抱いていた経営思想はなにかが探られねばならない。当時のドイツ大規模産業資本は、統合・コンツェルン経営の諸問題解決に対処する経済科学＝私経済学を要請していた（三三―三三三頁）。だから彼は、理論科学としての私経済政策（の一部分としての経営技術）を、具体的に展開しようとした（八三頁）。

しかもニックリツシユのばあい、第一次世界大戦下では、資本主義大規模企業の経営維持思想となって現われ（とくにA E